

美術館のオリジナル短編アニメーション「水グモもんもん」。

この映画に登場するミズグモは、世界で1種だけの水中で暮らすクモです。今では希少なミズグモを見ることができるのは、井の頭公園内にある自然文化園水生動物園です。

水生動物園では、井の頭池をはじめ、水辺に住む生き物を「昔の井の頭池」「東京の水辺」といったコーナーに分けて展示しています。ミズグモがいるのは「少なくなった淡水の生き物」コーナー。まずは水草に引っかかっている空気のかたまりに注目です。お尻を空気のかたまりに入れて、もぞもぞと動く黒いクモを発見。以前は小さな赤ちゃんグモも見ましたが、今回は立派な大人のクモ。巣を作っているところなのか、いつもより活発に活動をしていました。

ミズグモの展示は、映画をきっかけに職員の方が北海道まで出かけて採取してきたことが始まりです。水中に住む珍しいミズグモを間近に見られるところは他にないと思いますので、美術館ご来館の際に自然文化園に立ち寄るのはいかがでしょうか。おすすめです。



季刊トライホークス 2023年 | 71号

発行日……2023年6月2日 | 発行人……中島清文

発行所……徳間記念アニメーション文化財団

東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館

編集……石光紀子 塚原瑞穂 | デザイン……川島弘世

印刷……図書印刷株式会社 | 非売品

本棚より

トライホークスに置かれているおすすめの本を紹介していきます。
トライホークスの本棚の中の一冊から、みなさんの本棚の一冊にいただけたら嬉しいです。

モルグ街の殺人事件

この本には表題の「モルグ街の殺人事件」をはじめ、謎解き、ホラー、SFといった要素を持つ7編が収録されています。この中のひとつ「大渦にのまれて」は1941年に発表され、地味ながら傑作集に含まれることが多い短編小説です。登場人物は、聞き役の男と漁師の2人。ノルウェーの海岸で発生する大渦にのまれ、生還するまでの漁師の話を、男が聞く形で話が進んでいきます。

この小説は圧倒的な描写で読者を巻き込んでいきます。目の前に広がるのは、悪名高き「メールシュトレームの大渦」です。この世のものとは思われない叫び声にも似た咆哮をあげ、内側は黒光りする水の壁、まるで地球の裏側まで通じているかのように底の見えない大渦。巻き込まれれば、ひとたまりもありません。

漁師はこの大渦にのみ込まれ、一夜で白髪になってしまうほどの恐怖を味わうのですが、私たちがその状況を追体験することになります。何故大渦を避けることができなかったか、その理由に気づいたときには息が止まるような思いをし、船が渦にのまれていくところでは、まるでジェットコースターに乗ったかのように内臓が浮く感覚を得ます。そして待ち受けているのは死だけの状態で「きっぱりと望みを捨てると、臆病心も恐怖も消え、絶望のどん底でしゃんとした」と追い詰められた人間が行きつく先が描かれます。たった6時間の間に起こった出来事です。生と死を分けたものは何だったのか。読み終わったときには心も体も使った軽い疲労感を覚える、そんな短編小説です。



モルグ街の殺人事件

作……E.A.ポー
訳……金原瑞人
岩波少年文庫
品切重版未定

ぜひ図書館で
借りてみて
ください。



池田香代子

Kayoko Ikeda

夢中になって読んだ本

エーリッヒ・ケストナーの『動物会議』。原作が出版されてから70年以上。図書室に置いてあるのは、1999年に池田香代子さんが訳された大型絵本です。動物たちは、争いをやめない人間たちに怒り、「子どもたちのために!」とスローガンをかけ、平和への道を探そうとします。この本を必要としない世の中であればどんなにいいかと思いますが、現実はそのではありません。池田さんに紹介していただいた本とともに、大事に読み継いでいきたい本だと思います。

* * * * *

幼い頃は、ある絵本シリーズが夢の世界の入り口でした。それは1953年ごろに発刊が始まったトッパンの人形写真絵本で、1冊150円は、都の失業対策事業の日当240円（100円札2枚と10円札4枚なので、働く人は「ニコヨン」と呼ばれました）からすると、まさに目の玉が飛び出るほど高価でした。飯沢匡、川本喜八郎、土方重巳といった才能たちが、子ども向けだからこそ本気で作り込んだ美しい絵本で、人魚姫やヘンゼルとグレーテルやシンデレラに親しみました。貧しく色彩に乏しかったこの時代、親が奮発して買ってくれたこれらの絵本は、宝石さながらの輝きを放っていました。

文字の本に最初に入れ込んだのは、小学校の図書室で見つけた子ども向けSF全集です。『ハンス月世界へ行く』『少年火星探検隊』など、街角で演じられていた紙芝居の絵に通じる表紙絵や挿絵の物語が本棚いっぱいに並んでいるのを、片っ端から読みました。ハインラインの作品とはこの時出会いました。一時期、ペリー・ローダン・シリーズというスペースオペラの翻訳を担当しましたが、すんなりとSFの世界に入れたのは、この頃の耽読経験のおかげかもしれません。その次は江戸川乱歩の少年探偵団。男の子っぽい好みがばれてしまいましたが、正直、『若草物語』も『赤毛のアン』も『小公女』も『あしながおじさん』も

ピンと来ませんでした。

「本買って」が口癖でした。すぐに読み終えてしまうので、ある時叔父が、これならどうだとはかりに、煉瓦のような『ガリヴァー旅行記』を買ってきました。こびとのリリパット国、巨人のプロブディンナグ国、空に浮かぶラピュタ島、不死の人のラグナグ国、馬のフイヌム国のエピソードが抜粋された、子ども向けとしては本格的な一冊でした。文学書では初めて「わたしの本」となったこの本を、4～5センチはある背表紙がぼろぼろになるほど、何度も読み返しました。

小学校の高学年になると、講談社の少年少女日本名作物語全集に熱中しました。当時の第一線の学者と画家が手がけた全集で、とりわけ村松定孝が語り下ろした『源平盛衰記』は繰り返し読みました。

木曾殿最期のくだり、原文では、義仲が「日頃はなんとも覚えぬ鎧が今日は重うなったるぞ」と言い、たった一騎つき従っていた今井四郎の、雑兵にあたら討ち取られる前にご自害を、とかきくどく台詞がそれに続きます。これは、このあとすぐに遠矢を射かけられて死んでしまう主従2人のやりとりです。近くで聞いていた者などいなかったはずなのに、なぜか彼らの今際の言葉はわたしに届いています。不思議だなあという感覚が心の底に残りました。それが後年、民話をはじめとする物

語を勉強することにつながったのかもしれませんが。

勉強して知ったのは、日本の物語は、死者の思いはこうもあったろうかという、生き残った者たちの、死者を哀惜する想像力から生まれた文芸だということです。モノガタリとは、弱者や敗者として世を去らねばならなかった死者が残した思いを、モノノケが彼らになり変わって語った話、すなわちモノノケのカタリであって、そのような声に耳ざとい人が物語作者なのです。

これは日本に限らない、普遍的な物語文芸の本質だと思います。たとえばドイツの民俗では、森は人外境を意味します。飢饉の時、森に捨てられた子どもは少なくありませんでした。そんな、口にするのも憚られる、しかし人間として忘れてはならない陰惨な出来事を、「昔あるところに」とぼかして語ることは、育ててやれなかった子どもたちへの共同体の供養だったのです。せめて架空の物語の中で子どもたちを幸せにしてやりたいという思いが、白雪姫もヘンゼルもグレーテルも、物語のラストには幸せを掴むことにしているのです。

中学生になると、背伸びをして大人の文学に手を伸ばし、児童書からは遠ざかりました。大学時代は『指輪物語』のブームと重なり、またドイツ留学中は学生たちがまるでファッションのように分厚い『モモ』を小脇に抱えていたので、話の輪に入るために読み、斬新な文学世界に目を開かれました。人間社会に鋭い問いを突きつけるこのファンタジーはガリヴァーの系譜にある、と思いました。

子育ては、子ども時代に取りこぼした作品をフォローし、新しい作品と出会う願ってもない機会でした。『トムは真夜中の庭で』『ゲド戦記』『クラバート』などが本棚に並びました。岩波の少年

文庫は、多くをこの時期に読みました。後年、自分がここからケストナー作品を出すなど、夢にも思わずに。

毎晩、『ライオンと魔女』などの一節を子どもたちに読み聞かせるのが、楽しい日課でした。末っ子は2〜3行でことんと眠りに落ち、次男は目をらんらんと輝かせて寝るどころではなく、長男は物語の先が知りたくて、自分で『ナルニア国物語』全7巻を読み進めていました。そういえば、古本で買い集めた少年探偵団20数巻は、長男の愛読書になりました。

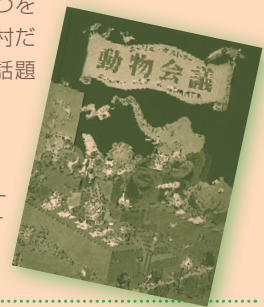
今は、孫に読み聞かせをしています。先の冬には『12の月のおくりもの』を、孫と友だちに読みました。あとで、真剣な顔で「ばあばが学校で読んだらすでいことになる」と言い合っていたので聞かすと、学校に読み聞かせの人が来るのですが、なんとわたしの方がじょうずだということです。あくまでも彼女たちの主観的な評価ですが、しみじみうれしかったことは言うまでもありません。

いげだ かよこ

1948年、東京都生まれ。都立大学卒。ドイツ文学翻訳家。かたわら日独の口承文芸を研究。翻訳に『グリム童話』(全5巻、講談社)、ゴルデル『ソフィーの世界』(NHK出版)、フランク『夜と霧 新版』(みすず書房)、ケストナー『飛ぶ教室』(岩波書店)など。チェーンメールをネット時代の伝承、「ネットロア」と名付け、その1つを再話した『世界がもし100人の村だったら』(マガジンハウス)が話題になった。

トライボックスの本

動物会議
文…エーリヒ・ケストナー
絵…ヴァルター・トリアー
訳…池田香代子
岩波書店 2,750円



1



2



3

① 怪人二十面相*

著…江戸川乱歩 ポプラ文庫 616円 ◆少年探偵シリーズ 全26巻

② ガリヴァー旅行記上*

作…J.S.スウィフト 訳…坂井晴彦 福音館文庫 770円
◆ガリヴァー旅行記 上・下巻

③ 指輪物語 I 旅の仲間 上*

作…J.R.R.トルキン 訳…瀬田貞二、田中明子 評論社 2,420円
◆指輪物語 全7巻

◆ナルニア国物語 ライオンと魔女* 著…C.S.ルイス 訳…瀬田貞二 岩波書店 1,430円 ◆ナルニア国物語 全7冊 ◆少年少女世界科学名作全集5 ハンス月世界へ行く 作…ガイル 訳…植田敏郎 講談社 絶版 ◆少年少女世界科学名作全集3 少年火星探検隊 作…イーラム 訳…白木茂 講談社 絶版 ◆少年少女日本名作物語全集7 源平盛衰記 訳…村松定孝 講談社 絶版 ◆モモ* 作…ミハエル・エンデ 訳…大島かおり 岩波少年文庫 880円 ◆トムは真夜中の庭で* 作…フィリパ・ピース 訳…高杉一郎 岩波書店 2,090円 ◆影との戦い ゲド戦記I* 作…U.K.ル=グウィン 訳…清水真砂子 岩波書店 1,870円 ◆ゲド戦記 全6冊 ◆クラバート 作…オトフリート・プロイスラー 訳…中村浩三 偕成社 1,760円 ◆十二の月たち* 再話…ボジェナ・ニエムツォヴァー 文・絵…出久根育 偕成社 1,980円

*印は、池田さんが選んだタイトルをもとに、現在入手できる本を編集が選びました。



イベントまでの道のり

「未来少年コナン」は、NHKがテレビ開局25周年を記念して製作した初のアニメーション番組です。宮崎駿監督の初監督作品でもあり、1978年（昭和53年）に全26話が放送されました。現在、美術館では「未来少年コナン」展を開催しており、企画展にちなんだイベント「熱きコナンファンよ 集え!」を2023年4月4日に実施しました。

このイベントの計画を立て始めたのは昨年夏の終わり、企画展がはじまって3ヶ月ぐらいたった頃です。展示室に立つスタッフの間で、コナンをリアルタイムで見ていた50～60代の方の反応が熱い!と話題になっていました。コナン展のために初めて来館される方が多く、中には朝一番に興奮気味で企画展示室に入られ、模型や展示をじっくりご覧になっている方もいらっしゃいました。何より、今まで以上にスタッフに声をかけていただき、放送当時の話題に花が咲き、話は止まらないという場面も度々ありました。「これだけ熱い想いを抱えている人がいるならば、語りたいた人が語り合う場所を作りたい」、とコナンファンでもある館長の強い要望が発端となりイベントの開催に向けて動きだしたのです。

日中に館内でイベントを行うためには、休館日である火曜日しかありません。奇しくも1978年のコナン放送開始日と同じ4月4日が火曜日だったので、この日に決めました。

内容についても、コナンファンが集まるファンの交流の

場とするのか、対談やトークショーのように誰かの話を聞く場とするのか、様々に検討されました。また、スタジオジブリの制作現場にもコナンファンがいるはず。まずは身近な人に、ファンだったらどんな会に参加したいかを聞きに行くことにし、大のコナンファンとして名乗りをあげた作画の井上俊之さん、本田雄さん、美術の吉田昇さん、制作業務の野中晋輔さんから話を伺ったのです。結果として、コナンへの想いも熱く話もおもしろい、この4人を差し置いて他の人に任せることはできないと思い至り、トークショーに登壇していただくことになりました。ちなみに、司会は館長が自ら行うつもりだったのですが、他の方を差し置いてあまりに話すと危惧され、司会は降板となりました。

こうしてイベントの内容は「聞こう・語ろう コナンへの想い!」トークショーをはじめ、お楽しみ企画として「企画展撮影会」、みなさんからの応募ハガキを展示する「熱き想いの掲示板」、そして『未来少年コナン』オリジナルグッズ先行販売会」と決まりました。

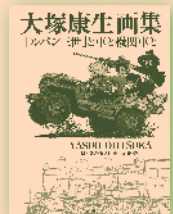
応募ハガキに書かれているのは「好きなキャラクター」「好きな話数」「コナンにまつわるエピソード」「登壇者に投げかけてみたい質問」です。どれも読み始めると止まらない、そんなエピソードが詰まっていた、登壇者4名のスペシャルメッセージと共に2階ギャラリーに展示しました。

このイベントの様子は、美術館ホームページに動画をのせています。「イベントの1日 大公開」とトークショーの午前の部と午後の部を織り交ぜた「トークショー総集編」です。放送日である毎週火曜日夜7時30分をどれだけ楽しみにしていたか、コナンを見ていなかったらアニメ制作の仕事を選んではいなかったこと、アニメーションに関わったからこそわかる作品の魅力など、アニメーションの作り手ならではの視点が新鮮で、中身の濃い話が盛りだくさんです。ぜひご覧ください!

トークショーでも度々話題にあがったのは、コナンの世界を支える作画力。実際にはありえない動きも、リアルに感じさせる“描く力”です。今回は「未来少年コナン」でキャラクターデザインと作画監督を務めた大塚康生さんの画集『大塚康生画集「ルパン三世」と車と機関車と』を紹介します。大塚さんのメカニック世界を紐解くとされたこの本には「ルパン三世」のメカニックはもちろん、少年時代に描かれた蒸気機関車や軍用車のスケッチが多数掲載されています。乗り物に対する並々ならぬ愛情を感じるこの本は、図書館でも乗り物が好きな子どもたちを度々夢中にさせています。



2階ギャラリーに展示された「熱き想いの掲示板」



大塚康生画集
「ルパン三世」と
車と機関車と
著者…大塚康生
玄光社 3,850円